

資料展示

<歴史に見る災害：『方丈記』『安政見聞誌』>

「ゆく河の流れは絶えずして・・・」という『方丈記』冒頭部分を覚えていらっしゃる方は多いのではないのでしょうか。著者の鴨長明(1155?-1216)は、20-30歳代に京都で「安元の大火」「治承の旋風(竜巻)」「養和の大飢饉」「元暦の大地震」を経験しました。『方丈記』の中段・後段では、独自の住み家に関わる人生観とともに当時の災害の様子も描写しています。

さらに時は下り、ペリー来港後の安政年間(1854~1860)は波乱の時代でした。東海、近畿、江戸で地震が頻発し、安政2年の江戸の激震と大火災では数千人が犠牲になったと言われています。この際の教訓を盛り込んだ情報や記録は『安政見聞誌』(あんせいけんもんし)『安政見聞録』(あんせいけんもんろく)などに誌されています。

2011年3月11日に東北地方と関東を襲った「東日本大震災」は、2万7千人の犠牲者・行方不明者と13万人以上の避難民を発生させた大災害となりました。地震と直後の津波による被害は甚大で、日本の社会や人生観に大きな影響をもたらすことになるでしょう。しかし、このような大災害は、「未曾有」のものではありませんでした。『方丈記』(大福光寺本)複製本と当時の災害の模様を伝える『平家物語絵巻』中の絵図、「安政江戸地震」を伝える『安政見聞誌』などの近世本を展示します。

立教大学図書館

<展示資料>

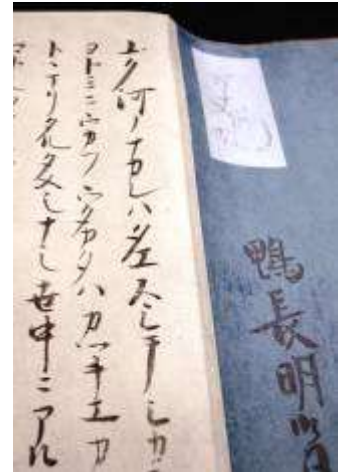
1. 『方丈記：大福光寺本』1971年日本古典文学会複製
2. 『平家物語絵巻』中央公論社 1990 第12巻
3. 『安政見聞誌』(あんせいけんもんし)
上中下巻 [仮名垣魯文]、[二世一筆庵英寿]著
一勇斎(歌川) 國芳等画 [安政3年]
4. 『安政見聞録』(あんせいけんもんろく)
上中下巻 服部晃善(保徳)著 一勇斎(歌川) 國芳等画 安政3年
5. 『安政風聞集』(あんせいふうぶんしゅう)
上中下巻 [仮名垣魯文] (物なしの翁)著 安政3年



『方丈記』について

鴨長明（法名蓮胤）によって書かれた随筆。1212年に成立。1巻。長明が晩年日野（京都市伏見区）に構えた方丈（約3m四方）の庵での閑居生活のさまと心境を記す。〈行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず、淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例（ためし）なし。世の中にある、人と栖（すみか）と、またかくのごとし〉で始まる格調高い文章は、和漢混淆文の完成された形として高く評価されている。人と住家の無常を述べた序章に続き、その例証として長明が体験した災厄、すなわち安元3年（1177）の大火、治承4年（1180）の嶋風（竜巻）、同年の福原遷都、養和年間（1181-82）の飢饉、元暦2年（1185）の大地震を挙げる。さらに俗世の居住は他を顧慮しなければならず心の休まることのないものであるといい、零落一方の自分の境涯を回顧して、筒世の後に仮のものとして構えた日野の外山の草庵で、かえって心の赴くままにすごせる現在の閑居のさまをよしとするが、末尾では一転して、その閑居に執着すること自体が往生のさまたげではないかと、みずからの筒世の実質を問いつめたまま、それに答えることなく〈不請（ふしよう）の阿弥陀仏〉を二、三遍となえるというかたちで全編の叙述を終える。《徒然草》とともに広く読まれ、後代文学に与えた影響は大である。

（平凡社大百科事典より）



『方丈記』からの抜粋

“ところで、私はものごとの分別がつくようになった十代後半のころから、四十年余りの歳月を送ってきた。その間に、この世にありえないような大事件を体験することが、度重なるようになってきた。”

“また（養和の飢饉と）同じころだったかと思う。巨大地震の発生があった。そのすさまじさは、この世のものとは思えなかった。山崩れが起きて土砂が河を埋め、海が傾いて津波が陸に押し寄せた。大地は裂けて水が噴き出し、巨岩は割れて谷底に転がり落ちた。海岸近くを漕ぐ船は打ち寄せ大波にもてあそばれ、道行く馬は足場を失って棒立ちになった。

“それほどのすごい本震は、短時間で止んだけれども、その余震はしばらくの間続いた。余震といっても、ふつうならば驚くほどの激しい揺れが、毎日、二、三十回ほど襲ったのだ。

しかし、十日、二十日と経つうちに、しだいに間隔が遠くなっていった。ある日には一日に四、五回、それが二、三回になり、もしくは一日おき、二、三日おきに一回というふうに減っていった。おおよそ三か月ほど余震が続いたように思う。”



「辻風」（竜巻）平家物語絵巻より



「元暦の大震災」平家物語絵巻より

※現代語訳は、『方丈記』武田友宏著（角川ソフィア文庫：ビギナーズクラシックス 2007）から引用させていただきました。

安政江戸地震について

『安政見聞誌』

安政年間（1854-1860）は激動の時代でした。1853年にはペリーが浦賀へ来航、日米和親条約、桜田門外の変など幕末の騒然たる時代でした。

安政元年11月4日に東海地震が、翌日の5日には南海地震が起こり、大阪に大津波が来るなど中部・関西地域で数千人の死者があったと言われています。これらの地震は江戸にはあまり大きな影響は与えませんでした。翌年の安政2年の午後10時ごろ突如、江戸を直下型の地震が襲いました。江戸城の石垣が崩れるなど地震の直接被害にも増して火災による被害も大きく、深川・本所・浅草・下谷などを中心に4千人以上が亡くなりました。



深川の出火と御救小屋(おすくいごや)等への寄進リスト



新吉原遊女屋の倒壊



余震の頻度や強さの記録



磁石を使った地震計の案



浅草寺の被害

インターネットやテレビのなかった江戸時代でも、大災害が起こった後は、瓦版や見聞録などの出版物が多く刊行されました。『安政見聞誌』（全3冊）は、地震直後に起こった火災の克明な記録と共に挿話や瓦版などが収録されています。二世一筆庵・英寿（ひでとし）と仮名書魯文（かながき・ろぶん）は刊行の依頼を受けると三日間で原稿を仕上げたと言われています。仮名書魯文（1829-1894）は、戯作者また明治初期の新聞記者として著名です。図版には当時の人気画家、一勇斎（歌川）国芳などが用いられました。この本は出版後、幕府によって発禁となり、版元と英寿は処分を受けました。

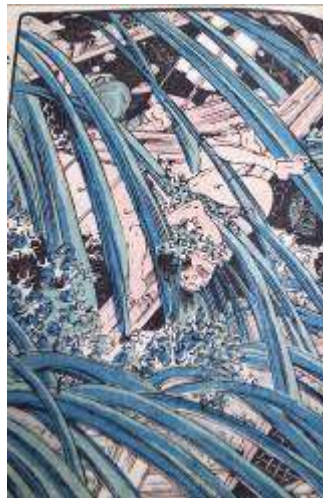
『安政見聞録』

服部保徳（晁善ヲセツ）が、やはり一勇斎（歌川）国芳などの画を用いて出版したもので、最初は私家版として出版されました。『見聞誌』を意識して作られたとされています。地震災害の実話集となっており、教訓的な話が多く、冒頭部分で次のような記述があります。

“大江戸では地震がめったになく、おりおり小地震があっても、屋根瓦を落とすほどではない。そこで俗に、江戸には「掘り抜きの井」といわれる井戸が多いが、そこから陽の気が常に発散しているのだ、大地震が少ないのだ、とって人々はすっかり安心してた。・・・”
(荒川秀俊著『実録・大江戸壊滅の日』より)



娘を助けようとする夫婦



地震後の大津波



泥水が噴き出た図

『安政風聞集』

江戸地震の翌年の安政3年8月25日に起こった江戸周辺の台風被害についての記録です。版元が『安政見聞誌』の売れ行きがよかったため、再び仮名垣魯文に執筆を依頼し、10日ほどで書き上げられたとされています。仮名垣魯文は、台風の進路にしたがって駿河から江戸まで、高潮の被害を追って被害状況や興味を引く挿話を取材しています。

